

間の用いた比較の座標軸(階級性, 個人主義, アソシエーション性)およびその構成因子と, 労働力タイプとは, うまく統一されるのだろうか。著者がもしイギリスの工場をも比較対象に加えられるならば, いっそう興味ある結論が期待されたよう。

〔神代和欣〕

中山 弘 正

『現代ソヴェト農業』

——フルシチョフ農政と位階制的職種階層——

東京大学出版会 1976. 6 329+ix ページ

本書はフルシチョフ農政期(1954~64年)を中心に, 独ソ戦開始の1941年からフルシチョフ後の70年代初めにいたる, ほぼ30年間のソ連における農業政策の展開と農業構造の推移を分析した実証研究の成果である。著者がその主題を解明するためにいかに徹底した文献渉猟とひたむきな問題追及を行なったかは, 巻末の引用文献目録に示された160点の研究文献と8種の雑誌・統計書, それらを用いてつくられ本文に収められた6図, 183表のデータがなによりも雄弁に物語っている。類書のきわめて少ない現在, かかる本格的な研究書の公刊の意義はまことに大きいといわなければならない。

本書の主要部分はずの3章から構成されている。第1章「第2次大戦と戦後復興期のソ連邦農業」, 第2章「フルシチョフ期の農業構造」, 第3章「フルシチョフ以後」である。これに短い序章と終章がつけ加えられており, そのうち前者では著者の方法論上の態度と本書の要旨が, 後者では本書における分析結果のいわば「まとめ」がそれぞれ述べられ, 読者の理解を助けている。以下, 各章の内容を概観し若干の感想をのべよう。

序章で述べられている本書を貫く著者の「方法論上の態度」というのは, いたずらに「反共主義」や「制度・政策の解説者の・護教論的」立場に立つのではなく, 「自らが置かれている資本主義日本……への自己批判」をふまえた批判的立場, つまり「社会科学的ないし学的立場」に立つことであり, 著者は, そうすることによってはじめて社会主義ソ連邦も, 「かげもありひなたもあるひとつの生き生きとした現実」として把握されうると述べている。ここには, 従来の社会主義研究に往々にしてみられたイデオロギー的偏りを排して, 対象の分析に社会科学的に迫ろうとする著者の誠実な態度がにじみ出ているといえよう。

第1章では, まず戦時下のソ連農業について, 戦争に

よるその破壊状況, 東部への疎開, 生産高減退などを跡づけたうえで, 著者はとりわけ農産物国家調達機構に鋭い分析のメスを入れ, じつは当該期のソ連農業がつぎのような「基本的構造問題」をかかえていたことを明らかにする。すなわち「四公六民とか五公五民とか呼んでみたくなる」ような「ほとんど全く無償の異様に大きな国家調達」が存在していたこと, そしてこの過酷な国家調達とかんれんして強権的農業集団化以来の「権力対農民」の緊張関係, およびコルホーズの社会化経営とコルホーズ員の個人副業経営という「二重構造」が戦時中をとおして強められこそすれけって弱められなかったこと, がそれである。

つぎに戦後復興期については, この時期にとられた農村党組織の強化, 急ピッチで生産される農業機械のエム・テ・エスへの集中的配備, 弱小コルホーズの統合などの諸政策によってソ連の農業生産はスターリン期の末ごろ大戦前に近い水準にまで回復しはするが, 戦時期にみられた過酷な国家調達がこの時期にもそのままの形で維持され, かくしてコルホーズ社会化経営は重工業を中心とする戦後の工業復興を支える「重要な国家資金蓄積の源泉」になっていたこと, そればかりでなくカードル労働力の流動性, 所得からみたコルホーズの地帯間・地帯内経営体間格差や経営内職種間格差(著者はこれを「位階制的職種階層構造」と名づける), ソフホーズの赤字経営などの構造的諸問題をも加えて, 総じてこの時期にはソ連邦農業構造のかかえる緊張関係はそれが戦時期から引きつがれたまま悪循環的に再生産され, まったく解決されることがなかったことが述べられている。

第2章ではフルシチョフ農政期が取りあつかわれ, まずその前半期(1958年まで)について, もはやソ連農業のこれ以上の停滞が許されない客観的事態を背景に登場したフルシチョフが処女地開拓運動, 作付構成転換策, コルホーズのソフホーズ化, 農産物価格引上げなどいくつもの「大胆・大規模・投機的な手」を打ち, その結果, 農業生産は全般的にまずまずの成果を収めたが, これらの諸政策はその実施過程をつぶさに検討するといずれも大きな問題点をはらむものであったこと, にもかかわらず農産物価格引上げ政策は, 30年代, 40年代を通じて国民経済とりわけ重工業建設のための蓄積源泉産業としての重荷を負わされてきたソ連農業が, 当該期にいたってようやくそのような地位を脱しようとしていることを示すものであること, が論じられている。

つづいてフルシチョフ後半期(1959年以降)については, エム・テ・エスの解体, 義務供出制の廃止と単一買

付価格の設定など「スターリン的ソ連の否定」を象徴するかの如き一連の政策が追加されてこの時期の出発点を飾り、また7ヵ年計画の意欲的展開をみたにもかかわらず、農業生産力がむしろ停滞してしまったことを指摘したのち、フルシチョフ後半期の農政のこのような破綻を必然ならしめた事情を明らかにするため、専門家層、機械手層、畜産労働者層、大衆的労働者層から成る農業労働力の位階制的職種階層構造とこれら階層間の大きな賃金格差、コルホーズ農家総所得に占める個人副業経営所得の依然たる大きな比重、農業労働力の相変らずの流出などこの時期の農業構造問題が詳細に分析され、それをとおして著者はつぎのことを確認している。すなわちこの時期のコルホーズは激しい機械化の進展のなかで、エム・テ・エスの機械の購入などのため相当の負担を負ったうえに、不足がちな熟練労働力を確保するため専門家層や機械手層に優先的に高賃金を支払わねばならず、そのため低所得コルホーズになるほど職種間賃金格差は拡大し、大衆的労働者層への社会化経営からの所得分配はより薄くならざるをえないという現象が生じた。となれば、そういう大衆的労働者層では「社会化経営のなりゆきよりは個人副業の営みに関心が集中」し、かくして社会化経営での労働にさしたる関心がもてない人々が広汎に形成されても不思議ではなく、このような生産活動参加者の「主体性」のあり方を再生産するメカニズムの存在が機械化の進展自体によって固定化されてしまった事態のもとでは、7ヵ年計画をふくめたフルシチョフ後半期の農政の失敗はむしろ必然ですらあった、と。フルシチョフ後半期におけるソ連農業の構造問題を扱った箇所は、本書において著者が最も力をこめて執筆された部分であり、その分析の深さにおいて、またその結果折出されたおどろくべき実態の点で読む者を圧倒せずにはおかない迫力をもっている。

第3章では、まず、現ブレジネフ＝コスイギン政権がフルシチョフ後半期にソ連農業が陥った停滞的悪循環を打破すべく推進している 1) 農業生産集約化、2) 農産物価格引上げ、3) コルホーズにおける「保証賃金制」実施、4) ソフホーズへの完全独立採算制(いわゆる利潤方式)導入などの堅実な諸政策のうち、1)は収穫率の向上をもたらし一定の成果をあげているが、その他の政策は当局の意図どおりの成果をあげえず、とりわけ 2)は畜産物において生産者価格(買付価格)の方が消費者価格より高いといういわゆる価格差補給金による「逆ざや」現象を表面化させたことが明らかにされる。このことは著者によれば、当該期においてソ連農業は国民経済の蓄積源泉産

業の地位を脱したとはいえ、それは自立的産業にはなりえないまま、被保護産業へと転じてしまったことを意味するという。つぎに著者は、これらの諸政策の展開によっても当該期ソ連農業の構造変革がほとんど全く達成されなかったことを示すため、農産物価格構造と位階制的職種階層構造(ここでは経営管理者・専門家、機械手、畜産労働者、建築・サービスその他の農企業構成員、野作業・雑役従事者の5階層に分類されている)の詳しい分析をおこない、また個人的副業経営の構造的残存、農業労働力の流出には依然たるものがあり、さらにはゆるやかではあるが明瞭な職種階層の事実上の世代継承の傾向さえ認められるとしている。

以上が本書の概要であるが、戦後復興期に以前にもまして蓄積源泉産業としての地位を与えられたソ連農業が、フルシチョフ期において従来の地位を脱しつつ、しかし産業としての自立的性格をもちえないままブレジネフ＝コスイギン政権のもとで被保護産業へと転じていき、フルシチョフ期はちょうどこの過渡期に当たるとする本書で提示された著者の見解、およびこれらの期間を通じて社会化経営と個人副業経営という二重構造、農業労働力の位階制的職種階層構造と流出傾向などがたえず悪循環的に再生産される構造問題としてソ連の農業・農村に定着してしまったとする著者のもうひとつの主張は十分に評価されるべき卓見であり、不振に悩むソ連農業における問題解決の困難さを深く掘りさげて示したものとして教えられるところが多い。ただし本書において著者が検出したソ連農業労働力の位階制的職種階層構造についていえば、著者は「終章」のなかでそれが「ある種の合理性をもったシステム」でもあるとのべられている。しかし本文においてはこの職種階層構造のもつ「合理性」の側面についてなんら言及されていない。この側面について本書の第2章もしくは第3章の当該箇所においていくぶんなりと展開しておいてほしかったように思われる。

〔宮鍋 幟〕

D. フォーブズ

『ヒュームの哲学的政治学』

Duncan Forbes, *Hume's Philosophical Politics*,
Cambridge, Cambridge U. P., 1975, xiii+338 p.

ヒュームの研究文献は、かれの死没200年を挟んでかれの多面的業績に応じてかなりの数に上るが、そのなかでここでとりあげるフォーブズ氏の研究は、氏が現代イ